

早稲田大学インクルーシブ教育学会 ニュースレター

2021年（令和3年度） NO.6

学びのユニバーサルデザイン（UDL）実践研究 ～「実践したい」を今こそ「実践できる」状態へ～

第5回研修会には、NY州スクールサイコロジストのバーンズ亀山静子氏と北海道教育大学の川俣智路氏の両氏を講師にお招きしました。バーンズ先生には本研究会創立以来、毎年、UDLの観点・ガイドラインに沿ってご指導いただいています。その中で参加者はUDLのよさを実感し、実践に挑戦してきました。しかし、その一方で、「UDLに興味はあり、自分の勤務校に取り入れたいけど実践できるか自信がない」、「一人一台端末が配備された今こそUDLを、と思うけど養護教諭の立場からは先生方にUDLの魅力を伝えられない」というような、今一步UDLに踏み出せない思いも聞こえてきました。そこで、今回は講義・実践者による実践報告・ワーク（ケーススタディ）を取り入れた研修会としました。また、参加者には川俣先生の「1から学ぶUDL」（YouTube）を事前視聴して研修会に臨めるようにもしました。



講師

NY州スクールサイコロジスト
バーンズ 亀山静子 氏

「UDLではないものから学ぶUDL」

～学びのエキスパートを育成する～

- ・UDLは特別支援教育？
- ・UDLはすべての子に対応できるメソッド？
- ・ガイドライン表の項目がすべて入っていないとUDLにならない？
- ・私の実践もUDL？
- ・複数の方法を用意すればUDL？
- ・UDLでは社会性は育たないのでは？
- ・ICTを使えばUDL？

違います！

UDLでないものからUDLを学ぶことなんてできるのでしょいか！？ その考えは、違いました！バーンズ先生が今まで受けてきた質問から、UDLに対する誤解を解いていくことで、より、UDLについて理解を進めることができました。



講師

北海道教育大学
川俣 智路 氏

「UDL とテクノロジー」

多くの教員が、PC を指導の補助具や児童・生徒の自習ツールとして考えているのではないのでしょうか。子どもに PC を与えて適切な使用ができるよう指導をすればよいのにそれをせず、使い方の制限をする「壁」が生じている例をたくさん見てきたのではないのでしょうか。また、全ての子が同じように操作できないといけないと思いませんか。川俣先生ご講義から、テクノロジーの使い方に対する考え方をえられたのではないのでしょうか。UDL では児童が「自分で学習を進めるツール」として考えることが重要ですし、教員が学習者へのサポートをサポートする「分身の術」という先生の言葉に背中を押された参加者は多かったのではないのでしょうか。課題の「GOAL」と「WHY」だけ与えて方法を自分で考えられる児童・生徒を育てていきましょう。

お二人の先生のご指導、ご助言を受けながら実践を進めていらっしゃる植田一宏先生<公立小学校教員>と谷口祥広先生<公立中学校の教員>の実践をご紹介いただきました。植田先生は、学校で先生を中心に、学校ぐるみで UDL に取り組み始めていらっしゃいます。谷口先生は、生徒の学びを深めるのに「よい課題を作る」という視点から、「カリキュラムを変える」という視点に変え、仲間を増やしながら実践を進めていらっしゃいます。お二人の先生が共通して仰っていたのは、「よき伴走者を得ること」と「変えられるところから変えていくこと」でした。多くの参加者から、「お二人の先生方からたくさんのヒントと励ましをいただきました。」と、感想が寄せられました。

後半は、グループに分かれてケーススタディを行いました。うまくいっているように見える授業であっても、UDL の視点から見るとさらなる改善策を見つけることができました。

<参加者から>



・講演は非常にわかりやすく、理論と実践の両方についてお話が合った点もよかったです。また、グループでのワークも人数や編成もバランスが良く、ファシリテーターの方も的確に話を展開してくださりありがたかったです。

・UDL について、誤解していたことが多いことに気づきました。カリキュラムを変える必要があるということは実感していましたが、「自分の学びを自分で舵取れる」ためのデザインを「意図的に」事前におこなうことと、結果的に何となく UDL に近い取組になっていたことは全く異なるということを知り、UDL のガイドラインをあらためてしっかりと読み直そうと思っています。

・UDL 実践を推進されている方、私を含めた実践し始めた方、これから実践してみようという方が参加されていたため、「疑問」「不安ごと」が出しやすかった。また、具体的な解決策まで提示していただけたことが大変ありがたかった。講義では、特に、伴走者の存在は重要であると感じた。専門に研修している方はもちろん、ともに UDL 実践に挑戦する方ともつながりながら、今後も実践を続けていきたい。

※事務局の松戸氏をはじめ、ファシリテーターとして参加してくださった実践者の方々にも感謝申し上げます。